

産学連携に「成功の方程式」はあるか

神戸大学経済経営研究所

政策研究リエゾンセンター

助教授 森田弘一

何かのノウハウやそれをパターン化したようなものが、「成功の方程式」と称して紹介されていることがよくある。そこで「方程式」の定義をふりかえってみると、変数を含む二つの式を等号で結んで表した命題であって、変数の値によっては等号が成立しないものもある。ならば、常に良い結果を求めることが前提となっているかのような「成功の方程式」という言い方は少しあやしい感じがしてくるが、逆に、本コラムのように産学連携活動にそれをなぞらえてみると、なんだか含蓄のある言葉のようにも思えてくる。

昨今、本学も含めて多くの産学連携活動の関係者はみな、それが成功することに漠然とした期待を抱いている。そんな期待をより確たるものとするために「成功の方程式」を立ててみると、左辺と右辺にはそれぞれ大学側の変数と企業側の多くの変数が含まれていることに気がつく。当然、方程式の「係数」や「次数」も複雑となり、その「特殊解」を数値的に見つけることは極めて困難な作業となる。但し、方程式が立てられさえすれば何らかの解が見つかる可能性はあるし、仮に「解がない」ということがわかるだけでも一応の結論はでることになる。

では、産学連携活動の「成功」とはいったいどういうものなのだろうか。必ず「解」が存在する方程式を立てることが成功だと言ってしまうと目的と手段が逆になる。ならば、解きやすく方程式を立てることだろうか。そのためには、変数の数を減らし方程式を簡単にしてしまうのがもっと早い。現に、大学の「産学連携リエゾン部門」は複雑な変数を整理・明確化することによって、連携活動の形式を単純化しようと努力してくれる。でも、形式に引きずられて中身までもが単純化してしまうと、大学の役割の本質でもある「知的探求」がおろそかになり、「質」の低下をまねくような気もする。

「成功の方程式」を立てるには、やはりそれぞれの役割分担に応じたカスタマイズが必要となる。ものづくりに例えるなら、要所の一つ一つを手作りで仕上げていく職人技が求められるはずだが、やっかいなことは、昨今の産学連携活動には「大量生産」を指向する

向きがあるように感じられることだ。もちろん、大量生産にも評価すべき点は多い。大量生産を行う企業は業績を拡大しつつブランドの浸透力を高めることができるが、商品の差別化を極める零細工房の職人がいい生活と名声を得るとは限らない。

大量生産時代にあって市場競争で勝ち残るためには、商品の特質によっては「生産能力」が重視される。また、商品の差別化要素が小さければ、価格面の厳しい競争を強いられることにもなる。従って、これからの産学連携活動では「質」だけでなく「量」も重視するのなら、一定以上の資源を有する者にのみ実行可能な高度な戦略としての「マス・カスタマイズ」が必要となる。このように考えると、「産学連携に成功の方程式はあるが、多数ある」という、「控えめで、ふつうの大学」とにとっては誠にありがたくない結論が導かれる。

そもそもなぜこのような表題のコラムを書こうと思い立ったのか、それには少し理由がある。先日、本学の将来戦略に関係する用務で中国の清華大学を訪問する機会があった。中国の大学事情については産学連携のしくみを含めて様々な情報が伝わっていたが、実際に意見交換をして、中国の大学は国家レベルでみた技術・人材・資金の集積拠点であり、企業活動（あるいは経済・産業活動）のベースキャンプのような役割を担っていることを改めて実感した。日本の企業がそのような中国の大学と連携活動を進めていくに際して、おそらく、日本の大学とは異なる心地よさを感じるであろうことは想像に難くない。なぜならば、そこにはわかりやすい「成功の方程式」が存在しているからだ。しかし、あえて言うならそれは成功の「公式」であって「方程式」ではない。どちらが望ましいのかというのではなく、その本質が異なるということなのだ。

あるプロ野球チームがゲーム終盤にリードを守りきるべく、実況アナが「勝利の方程式」と呼称する投手継投を行う。だがそれは「勝利の公式」ではない。案の定、監督やファンの期待とは裏腹にその結末は時に劇的である。同じように「イノベーション」の「クローザー」たる「産学連携活動」も、公式にとらわれない未知への挑戦者である方がドラマチックでいいではないか。